

Title	フューチャリストを目指して
Sub Title	
Author	茂木, 健一郎(Mogi, Kenichiro)
Publisher	慶應義塾大学工学部
Publication year	2007
Jtitle	人間教育講座：社会を知る自分を知る自分を育てる (2007.) ,p.41- 78
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Book
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO50001001-20070000-0041

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

フューチャリストを目指して

脳科学者、ソニー・コンピュータサイエンス研究所シニアリサーチャー

茂木 健一郎



脳科学者。ソニー・コンピュータサイエンス研究所シニアリサーチャー、東京工業大学大学院連携教授（脳科学、認知科学）、東京芸術大学非常勤講師（美術解剖学）。その他、東京大学、大阪大学、早稲田大学、聖心女子大学などの非常勤講師も務める。一九六二年十月二十日東京生まれ。東京大学理学部、法学部卒業後、東京大学大学院理学系研究科物理学専攻課程修了。理学博士。理化学研究所、ケンブリッジ大学を経て現職。専門は脳科学、認知科学。「クオリア」（感覚の持つ質感）をキーワードとして脳と心の関係を研究するとともに、文芸評論、美術評論にも取り組んでいる。「脳と妄想」で、第四回小林秀雄賞を受賞。

二〇〇六年一月より、NHK『プロフェッショナル——仕事の流儀』キャスター。

僕は大学共通一次試験が導入されてから二年目にあたる世代なのですが、大学入試の正月休みにも麻雀をやっていた不埒なやつです。僕が大学に受かったことを聞いた中学の同級生が電話をかけてきたときにも、なぜか家族で麻雀をやっていました(笑)。電話をかけてきてくれたのは、中学校のときにちよつと気になっていた女の子だったんだけど、当時は携帯もないから、家の黒電話で「合格おめでとう」「ありがとう」なんて言うくらいで、ろくに話もしないで切ってしまった。あとで「悪かったなあ、どうしたらいいだろうか」と思ったけれど、その子の連絡先は知らなかった。彼女が慶應義塾大学の法学部に合格したことは知っていたので、初めて日吉まで来て、とりあえず学生課に行つて、僕の連絡先を伝えてくださいとお願ひしておいたら、向こうから電話がかかってきた。それが後に僕が理学部から法学部に進む理由のひとつになるとは、人生とは本当に不思議なものだと思います。

理系と文系

これから僕がお話することは、ひとつの理想を語ることになるかもしれません。君たちはすでに高校の頃に理系・文系のどちらかを選択させられて、今、理工学部の学生としてここにいるのだと思います。しかし、これからの時代に理系・文系という区分が意味を持つと思いますか？

たとえば、コンピュータ・ネットワーク上のいろいろなサービスがあるでしょうか？ そのひとつ、SNS（ソーシャルネットワーキングサービス）の歴史を見てみましょう。かなり初期にorkutやGREEなどが出てきました。僕は新しいモノ好きなので、そういうのは全てやります。そしてEメールが大ブ

イクした。僕も早めの番号を持っていたけれど、マイミクが五〇〇人を超えたら、わけのわからない日記が更新されると僕のところに来るようになって、頭がおかしくなりそうだったので、やめてしまいました。後で思うと、もったいなかったけれど……。mixiは大ブレイクした。mixiは、orkutとGREEとは何が違ったんだと思いますか？ この差ってどうやって説明できると思いますか？ この差を説明するという問題を立てたときに、果たして従来の理系の学問で説明できると思いますか？

今、FacebookというSNSが出ています。アメリカでは去年はYou Tubeで、今年にFacebookと言われるぐらい、今やすごい人気らしいけれど、日本で流行るかどうかは疑問だけだね。Facebookのミッション性にはちょっと感動的なのがあります。寂しい学生はmixiをやって友だちができたりすると、嬉しいかもしれない。僕なんかはただでさえ忙しくて死にそうだから、ある意味でストレスになるけれど、マイミクの楽しさはわかる。だけど、Facebookは、mixiのようにネット上にアーティフィシヤルな関係を作ること目的としているのではなく、われわれが今いるこの社会をよく理解するためのツールにしてほしいということを目指しているんだ。

たとえば、僕はソニー・コンピュータサイエンス研究所というところにいるし、東京工業大学で研究所を持っているし、毎週二回仕事でNHKにも行ったりする。いろいろな編集者も知っているし、研究者仲間や飲み仲間もある。東京芸術大学でも教えているので、アーティストたちとのコネクションもある。しかし、僕は自分の人間関係のネットワークを十分に理解してはいないと思うんです。Facebookは、mixiのようにマイミクの増加率を競うサービスではなくて、われわれが今いるリアルなネットワークの性質を可視化し、何かをしたいと思っているSNSです。

まあ、Facebookの話はさておき、GREEやorkutとmixi、そしてFacebookのサービスの優劣の差は何で決まるかということですが、答えを言えば、人間によって決まるんですね。君たちがそれを選んでいるのです。

You Tubeとニコニコ動画のどちらが今後多くのユーザーを集めるか。この二つを比較すると、まずトップページからしてちがう。ニコニコ動画はジャンク性があるというか、ごちゃごちゃといろいろな情報が書いてある。システムもすぐわかりにくい。まだまだ日本の手作り感があふれていて、ちよつと2ちゃんねる的なDNAが入っている。You Tubeとニコニコ動画のどちらがこれからユーザーのハートを掴んでいくか……、これはわれわれ認知科学者の立場からしてみれば、認知科学、脳科学の巨大な実験、Mega Experimentなんです。

たとえば、もし君たちがITベンチャーを興して、すぐお金を儲けたいと思ったら、もう理系という枠に収まるはずがないのはあたりまえでしょう？ 要するに「人間とは何か」「人間とは何を求めるものか」ということに理解がなかったら、そんなことができないというのはロジカルな話です。だから文系・理系と分けることはナンセンス。ぐずぐず言わないで全部やれ！ ということです。こんなことを言っていないかどうか分からないけれど、「理工学部」という言い方が僕はあまり好きじゃないんですね。もはや意味がない。

とはいっても、もちろん専門性は大事です。僕は物理学科出身だけど、物理学科ならたとえばディラック方程式を知らなければどうしようもない。しかしそうした専門的な知識に加えて、「人間とはなにか」を理解するというミッションがなかったら、君たちの人生は絶対に輝かない。そして、そのことを考え

たときに、われわれの脳のなかにある快楽のネットワークを耕すことが大事だということを、まずお話したいと思います。

脳と快楽

「快楽主義」というと、とても簡単なもののように思うでしょう？ 「あいつ、快楽主義者なんだよ」というと、生物的な、原始的なイメージを思い浮かべますよね。しかし、人間の脳の快楽とはそんなに簡単なものではありません。これこそが、ある意味でわれわれ認知科学者が今や大発見しつつあることです。

僕は認知科学、認知神経科学 (cognitive science) を研究していますが、これは簡単に言うと、日常にありふれていて、一見単純に見えることの背後にすごいことがあるかということ再発見する学問であり、宇宙全体をもう一度発見し直しているような学問です。

たとえば、「Turn taking」という言葉を聞いたことがありますか？ われわれが会話をしているときに、Aさんがしゃべって、Bさんがしゃべって、またAさんがしゃべって、さらにBさんがしゃべってというように、なんとなく話者交替 (Turn taking) をやっています。これがいかに行われているかということは、認知科学的には非常に興味深い問題なんです。「そろそろしゃべり終わったから、相手にわたそうかな」と感じてあるでしょう？ なぜ turn taking ができるのだろうか。Turn taking の技法ってアルゴリズムに書けるのだろうか。これはとてつもなく難しい問題です。Turn taking という

われわれが日常的にあたりまえのようにやっていることがとても難しい。これが人間を理解することなんです。

ユーザーインターフェイスにしてもそうですよね。なぜ「Pod touch」を使うと気持ちがいいのか。こうしたありふれたことのなかにいろいろな秘密があるんです。携帯電話にしてもそうです。携帯電話は、脳科学的に言うくと、地上最強のドーパミン発生装置なんです。人間には関係性欲求というのがあって、君たちの携帯電話がふるえると、君たちの脳のなかにドーパミンが出る。ドーパミンが出ると、「強化学習」が脳のなかで起こって、ドーパミンが出る前にやっていたことが脳内で強化されるんです。これが脳の快楽原理です。君たちは便利だから携帯電話を持っていると思ってるかもしれないけれど、脳内でドーパミンが出て、一種の依存症になっているんですね。こういう現状のなかに、われわれの研究における重大なヒントが隠されているんです。認知科学とはそういう学問です。

たとえば、ペットボトルという物質。ニュートンは力学でこういう物質の放物線軌道を記述したけれど、ニュートンはそもそも剛体がなぜあるかということについては説明できなかった。それは原子などが発見されなければいけなかったから。さらに原子が発見されたときには、なぜ安定しているのかということが問題になって、それを突き詰めていったところで量子力学が出てきた。つまり原子核のまわりの電子の軌道というのは、量子力学的なとびとびの自由しかとれないので安定している。だから、マクロな物体の安定性は、われわれにとっては当たり前のことなんです。ペットボトルがペットボトルであって、石が石であるというのは当たり前のことだと思っていただけでしょう？　ところが、その背後に原子があって、量子力学があるということが判明したわけです。

それとまったく同じことが人間や生命、あるいは環境について起こっている。そういうきわめてエキサイティングな時代にわれわれは生きていくわけだ。

もう一度繰り返します。認知科学というのは、日常でごく当たり前のことだと思っていることの奥に、いかに驚くべき真理が隠されているかということの研究する学問です。ペットボトルや石ころが原子からできていて、量子力学的安定性によって崩壊しないことがわかるように、君たちがたとえば誰かを好きになることは実に驚異なことだと思いませんか。

偶有性の二つの意味

僕はなぜあの日、日吉に来たんだろう……。僕にはそれがとても不思議です。これは、われわれの研究では「自発性」(spontaneity)と言います。君たちはなぜ突然「海に行こう!」と思うのだろうか。なぜコンビニに行つてある飲み物を選んだのか。君たちはなぜ今その座席を選んで座っているのか。不思議でしょう? さらに隣に座つた人が誰かで、君たちの人生が変わるかもしれない。これらすべてが認知科学の研究対象になります。

こうしたこと、先ほど言った、GREEやorkut、mixi、Facebookの優劣がどう変わるかということとは連動しています。たとえば、Second Lifeはブレイクすると思いませんか? これは、Second Lifeの技術仕様などを見ているだけではわからないんです。人間を理解しないとだめなんです。そして人間を理解するということはそんなに簡単なことではありません。きわめて難しいことです。というのは、

人間というのは「偶有的」な存在だからです。

「偶有的」「偶有性」という言葉には二つの意味があります。まず一つ目の意味は、「何が起こるか予想ができない」「何をやるかわからない」ということです。

ややこしい話なだけで、不確実性にどう適応するかということは人間の最も大事な機能のひとつなんです。僕が司会を務めているNHKの「プロフェッショナル——仕事の流儀」という番組は見たことがありますか？ 二〇〇七年十月三十日放送の回には自閉症児を支援している服部智子さんという人を紹介しています。自閉症 (autism) というのは、簡単に言うと、不確実なことに適応できない人たちです。自閉症の人たちは、よく「他人の心が読み取れない」「心の理論がない」と言われます。その本質は何かというと、他人の心というのはわれわれにとつて最も予測しがたいもので、偶有性に充ちているということ。他人というのは偶有的な存在なので、他人のことをわかったと簡単に思わないほうがいい。そんなに簡単にはわからないし、どんな人にも絶対に surprise が潜んでいるのだから。

「偶有性」の二つ目の意味は、「君たちは他の誰でもありえただけで、なぜか君としてここにいる」ということです。John Lennon の『Beautiful Boy』という歌のなかに『Life is just what happens to you while you're busy making other plans』という歌詞があります。日本語に訳すと、「人生とは、他のいろいろな計画を忙しく立てているうちに君に起こってしまうことである」という意味で、つまりこれが偶有性です。

偶有性を楽しむ

偶有性を持つということは、実は脳ということを離れても、生命を理解する上では非常に大きなことです。生命として「ノイズ」をどのように処理しているかということが一番難しいことなんだ。これは君たちの人生における「ノイズに対する態度」ということにも関係するわけで、社会との関係において偶有性というのは非常に大事です。

もう一度言います。偶有性というのは、予想できる部分もあれば、予想できない部分もまじっていること、そしてもうひとつは、自分は他の誰でもありえなければ、自分として今ここにいるということですね。その二つこそが、われわれの生命を輝かせるための条件なのです。偶有性というのは生命のエンジンであって、これがなくなったら人はもう終わりだとも言えます。

先日、九州大学での講演で、しゃべりながら、話を聞いている学生一人ひとりの顔を見ていき、「僕は向こうに座っている誰とでも交換していたかもしれない」と思っていました。なかには「こいつと交換してみたい」という人がいれば、「こいつだったら困る」という人もいます。ただどすくわくわくしたんですね。そのポイントは何かというところ、たとえば女の子だったら、サトエリ（佐藤江梨子・女優）の風貌とアインシュタイン並みの頭脳を持ち、スポーツマンで、性格もよくて、家柄もよくて、かっこいいボーイフレンドがいるような人と替わりたいということではない、ということですね。条件がものすごく悪い人と替わったとしてもいい。たとえば、ルックスが個性的で、家が傾いていて、志望大学にも落ちて、彼氏にもふられ、バイトもクビになって……という人の人生においても、偶有性はあるんです。

よ。そして偶有性を楽しむということは、どんな人生のレイヤー、どんな人生のステージにおいてもあるんです。その感じを伝えられたら、今日の講演はもう満足なんです。

人生には通過地点はありません。君たちが大学一年生のときには一年生のときの偶有性があるし、今の僕には今の僕の偶有性があるわけです。たとえば、今の僕の偶有性は何かというところ、指導している学生の論文が通るかどうかということだったりする。僕は本当に今、自分が偶有性の海を泳いでいるという気がします。たとえばNHKの番組の視聴率が何パーセント取れるかとか、自分が出した本がどのくらい売れるか、自分自身のクオリアに関する研究がどれくらい進むかなど、ものすごくたくさん偶有性に満ちている。今日もここに来るときに東横線の通勤特急に乗ってしまった、それが日吉駅にとまるのかどうかとか。すごく心配だろう？「どうしよう、横浜の方まで行ってしまったら……」とか、そういう偶有性に満ちているわけです。

人生を振り返ると、中学時代、高校時代、大学時代、大学院、ケンブリッジに行って、ソニー・コンピュータサイエンス研究所に入って……、僕の人生のどのステージを見ても偶有性はあったと思う。そのあたり方は違ったけれど。そこを見定めなくてはいけなくて、だからサトエリのような風貌で生まれた子にはその子なりの偶有性があるし、一方で個性的な風貌の女の子にも偶有性があるわけです。

僕がたとえば、そのちょっと個性的な顔の女の子だとしましょう。そうしたら、僕の人生にはきつとすごくいろいろな胸のときめきがあると思わないかな？ どういうことかというところ、自分がいいなと思うっている男の子に優しく声をかけてもらおうと、「わっ」とときめいたりして、自分の人生をどううまく切り盛りしていこうかみたいなことを考えてしまったりする……。君たちも想像してみてよ。その感

じ、わかるかな？

君たちが、たとえば弘前の駅前ソバ屋でバイトをしている二十三歳ぐらいの、ものすごく個性的な顔の女の子だったでしょう。冬にはほつぺたが真っ赤になって、あかぎれもできたりする。今、一応彼氏がいるんだけど、その彼氏はパチンコ屋の店員で……、というような生活を思い浮かべてほしい。その子の人生には、君たちと同じだけの偶有性があるだろう？ 偶有性というのは、予想がうまくできないこと、しかしそのなかに何か規則性があつて、それを学習することはできるけれど、その学習は必ずノイズによって裏切られる。想像できました？ 弘前の駅前ソバ屋でバイトしている二十三歳の個性的な顔の女の子になったときに、楽しいと思わない？ 脳科学的に言くと、それで十分に楽しいはずなんだ。

たとえば、研究者になつて、将来ノーベル賞を取れるかもしれないという偶有性と、駅前のソバ屋の女の子が「彼は今日も店が終わつたら、ちゃんと私のところに帰ってきてくれるかなあ」と思う偶有性とは同じなんですよ。そのことさえおさえたら、脳の原理としては間違いありません。

偶有性を失う危機

ところが、人間は、知恵や経験を身につけることによって、往々にして偶有性を失つてしまいます。僕にも何回か偶有性を失いそうな危機がありました。実は僕は一時期、頭でっかちだったんです。大学に入った頃は頭でっかちだった。だから救いを求めて日吉に来たんだな、きつと（笑）。なんとなく直

感的に「この女性は僕に偶有性を与えてくれる」と思ったんだろうな、当時は。たいてい男の子のほうが精神年齢が幼いから、僕みたいな頭でつかちなやつはこの中にもたくさんいると思う。知識とか経験がそのまま自分の人生でどう生きるべきかという指針を与えてくれると思ってしまうたら、その瞬間に、君たちの人生は硬直化し始めてしまっているんだよ。

漫画の編集者で、浦沢直樹とずっと組んでいた長崎尚志さんを知っていますか？ 今日、ここに来るまでNHKの番組収録をしていて、この長崎さんとずっとお話していました。長崎さんという人はすごい人で、『MONSTER』や『PLUTO』を描いた浦沢直樹さんもちろん天才なだけけど、長崎さんがいたから、あそこまで出来たのだと思う。まさに長崎さんは「知恵や経験がじゃまをする」ということを言っていたんです。長崎さんほどの人でも、すごくいい作品ができたときには、これほどいい作品はもう二度とできないのではないかと思うそうです。でも、そこで過去の経験や名声、成功体験などすべてを忘れて、初めて何かをやるかのように前に進まなければ、クリエイティブにはなれないと言っているんです。いつもあなたも初めて人生を生き始めたように生きなければいけない。知識や経験を蓄積してくれて、必要に応じて全部バックアップしてくれる脳の記憶の回路も確かにあるんだけど、それをあえてあなたも初めてやったかのように何かをしないと、偶有性というものを十分に味わえないわけです。だから、僕が苦手なのは「こうだろう」「ああだろう」と決めつけてくる人です。なぜ決めつけてくる人が苦手かというと、そういう人は偶有性がちよつとやせ衰えてしまっているから。

赤ちゃんはダブルタッチをします。ダブルタッチというのは、さわりながら、同時にさわられるということ。赤ちゃんは自分のからだの範囲がどこまでかを知らないわけで、自分で自分のからだをさわ

りながら、脳の中にボディシエーマという身体の図式を形成していく。自分のからだの範囲というの、さわることか、さわられることで決まっているわけ。この赤ちゃんの身体発見のエキサイティングなプロセスを想像してみてください。すごい偶有性があるでしょう？

君たちが最初に言葉を発した日というのもあるはずですが、でも、君たちはそれまでずっと言葉のシャワーを浴びていたはずですよ。大人は「この子はまだブーブー言っているだけだから、今日は三百語だけを使って話そう」なんてことは考えてくれないわけだから。君たちの親が仮に学者だったとしたら、君たちがブーブー言っている横で、「偶有性の確率的構造は図形的な図式では書ききれないから、いかにグラフ理論における結合の図式をひとつの解析的な手法として取り入れることに対して……」というような会話をしていたかもしれません（笑）。そんなふうにして脳内に経験が蓄積されていって、あるときに言葉を発するわけで、これってすごくないか？ アームストロング船長が月面に降りたときに、「これは一人の人間としてはほんの小さな一歩だが、人類にとつては大きな飛躍である」と言ったのと同じようなことが、君たちの脳の中で起こっていたわけでしょう？ それと同じことを君たちはずっとやり続けなくてはならない。そうでなければ、人生は意味ないでしょう？

「感動するのをやめた人は生きているのをやめたのと同じことだ」と言ったのはアインシュタインだけど、その通りなんだよ。それさえおさえておけば、怖いものはない。何をやってもいいんだから。僕は今、脳科学の研究をしているけど、明日からパチンコ屋の店長をやってもいい。パチンコ屋の店長には店長なりの偶有性があると思うから。出玉率をどうしようかとか、いつも十時の開店と同時に来る人がいるけれど、その人をどうやって阻止しようかとか（笑）、いろいろと考えて、いろいろと工夫する

でしょうか？　そこにあらわれている偶有性は、極端に言えば同じなんですよ。

福澤諭吉と具有性

今日（二〇〇七年一〇月三〇日）、早慶戦、ちがった、慶早戦があっただけれど（笑）、ハンカチ王子こと斎藤佑樹君が投げて、慶應は〇対七で負けたよね。〇対七で負けたっていうことは過去のことじゃない。過去には偶有性はないんですよ。斎藤君は「ハンカチ王子」とか言われて、ちやほやされているわけだけれど、それに対して慶應のバッターが一泡吹かせてやろうと思いつながらバッターボックスに立つたものの、すごい球を投げられて、「あいつ、すげえ！」と思っている様子とか、そういうプロセスを想像してみてもほしい。自分が仮にその試合でバッターボックスに立っていると、斎藤君が投げた球が自分の目の前を通っていった感じを思い描いてほしい。それこそが人生なんだ。「伝統の早慶戦が行われました」というふうに三〇秒ぐらいに編集されてしまったスポーツニュースはすでに情報として死んでいるんだからね。そう考えたら、人生にはいかに多くの偶有性が満ちているか。至る所に偶有性があるでしょう。つまり君たちが生きている限り、偶有性って偏在しているんですよ。偶有性に上下区分はないのです。

ここから慶應大学だからと思つて用意しておいた内容に進みます。君たちは慶應義塾というすばらしい大学に入って、「一応人生はこれでOK」と思っているかもしれないけれど、福澤諭吉先生が言った「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」ということを深く考えてほしい。慶應大学に入っ

たということに安心している部分はあるでしょうか？ それは偶有性の敵だよ。偶有性というものは、もうちよつとちがうんだ。

『ウェブ進化論』（ちくま新書）の著者である梅田望夫さんと僕は、一緒に『フューチャリスト宣言』（ちくま新書）という本を出して、そのなかで「今や最高学府はインターネット上にある」と書きました。僕が学生の頃の学問環境からは激変して、今や君たちはインターネット上で何でも読める。脳科学でも認知科学でも、コンピュータ科学でも、物理学でも、何でも最先端のものが読めます。昔は大学図書館に行かないと読めなかつたんですよ。だから、大学という建物はある意味ではいらなと言つてもいいかもしれない。大学もある意味では「人」なんです。忙しいティーチングスタッフがいて、クラスメイトがいるというような「人」は大事だけれど、学術情報自体は大学の独占物じゃなくなりました。

君たちは慶應に入つて喜んでいるかもしれないけれど、学術情報を得る機会自体は弘前駅前のソバ屋でバイトをしている女の子にも同じようにあるわけだ。このことの歴史的意義というのを僕たちはきちんと考えなくてはいけない。まさに「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」で、誰でも学問はできるんです。ただひとりをやつてみると、ヘンなクセがついてしまうので、ちゃんと人と会つて議論する必要があるということです。

大学は「人」だけがリソースなんです。学術情報はどこにでもある。逆に言えば、君たちは大学生だからと安心していたらいけない。僕のほうがもっと勉強しているかもしれない。その意味では僕のほうがもっと大学生かもしれない。油断していると、あつという間において行かれるし、輝かなくなってしまう。

だから福澤先生の「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」という言葉は学問の本質でありながら、偶有性の本質でもあるんです。福澤先生が言われたことは、当時の時代背景を反映しているわけです。福澤さんは門閥制度は親の仇でござる、と言った。福澤さんは、親が下級武士だったから苦労した、だから親の仇だと言っているわけです。君たちの「仇」は何なのか、よく考えたほうがいいと思う。

抑制を外す

たとえば偶有性をうまく輝かせている人の例として、ビートたけしさんを挙げましょうか。あの人、いつも楽しそうにしているでしょう？

君たちには、北野武＝文化人というイメージがあるかもしれないけれど、彼は最初は「ツービート」という漫才コンビをやっていて、その頃はすごくおもしろかったんですよ。「寝る前にちゃんと絞めよう親の首」とか、とんでもない毒ガスの漫才をやっていた。そういう人がいつの間にかベネチアで映画賞を取って、「世界の北野」になりました。

彼の人生ってすごく偶有性に満ちているんですよ。知っているかどうかわからないけれど、彼は以前、フライデー事件ってのを起こしている。当時つきあっていた女の子がフライデーに写真を撮られたからといって、激怒して、講談社のフライデー編集部に乱入しました。すごいことですよね。

ビートたけし、北野武という人の人生がすごく偶有性に満ちていることがわかりますか？ だからと

いって芸人になる必要はなくて、エンジニアでも、研究者でも、自分の命を輝かせればいい。そのときに重要なことは、彼と似たような感覚を持つてほしいということです。偶有性を輝かせる敵になっているものがいっぱいあるんだけど、脳はそういう敵や抑制を外すことで自然に何かが始まるという性質を持つているんです。これを「脱抑制」と言います。無理する必要はないわけ。抑制を外せば、脳が勝手にやってくれる。偶有性の敵が何なのかということをよく見極めてほしいということなんです。僕は大学生のとき、とてもガチガチだった。いろいろと思いこんでいたことがあった。そして、そういうことから外れていくことがいかに大事なことだったか。今でも僕は抑制を外しながら生きているんですよ。

劣等感

劣等感との付き合い方は、偶有性を考える上でとても重要で、今の僕にとって劣等感是非常に大事なテーマになっています。この世の中には連戦連勝でワッハッハと笑いがとまらない人がいるかもしれないけれど、たいていの人には苦しいことや思い通りにいかないことがある。劣等感ということが、どのように君たちの人生に作用してくるかということ、偶有性のとらえ方は変わってきます。劣等感を持つている人は、へたをすると、社会に対する恨みつらみやルサンチマンなどにとらわれてしまい、偶有性をなくすことがある。でも劣等感とうまく付き合うことができると、君たちの人生を輝かせることができます。

進化論を唱えたチャールズ・ダーウィンは劣等感のかたまりだったし、勉強がでさなくて落ちこぼ

れで、親父が心配してエディンバラ大学に入れたほどだけど、それが後に『種の起源』という立派な本を書くことになりました。アインシュタインはドロップアウトですからね。ギムナジウムの厳格な教育に耐えられなくて、無国籍者として、十代のときにヨーロッパを放浪していた。だからああいうふうになれたのだと思います。また、ロシア文学が今、ブームですが、ロシア文学全体が輝いていたのはヨーロッパに対して劣等感を持っていたからです。

逆に言うと、慶應の学生はうまく劣等感を持たないと、人間としての深みが出ないということです。劣等感というのは、自分自身を問い直させて、生命の底力を出させるものだから、慶應の学生というところで安心していたら、もうだめなんだよ。今日、長崎尚志さんが「すごい漫画家とは、逃げ道がなくて、漫画を描く以外になにもできない人」だと言っていました。そういう人には何かが憑依するんだな。そういうところまで行くためには、自分自身の劣等感を押し下げていかなければいけない。みんな、劣等感ぐらい、あるでしょう？

でも、劣等感が脳の中で抑制をかけてしまうこともある。どういうメカニズムで劣等感が抑制をかけるのかというと、その代表的な例は劣等感を他の人にさとられないようにしようとすることです。これが周囲の人に非常に伝わる。その人が一番劣等感を持っていることをいつも気にしていて、いつか誰かに指摘されるんじゃないかと思っている状態は、すごく周囲の空気を凍らせるでしょう？ そういうことからこそ、君たちは自由にならなくてははいけない。それは自分のためなところを受け入れるということでもあるんです。

建築家の隈研吾さんも「プロフェッショナル」に出演してくれました。その中で彼は「負ける建築」

と書いていました。今の建築は、安藤忠雄さんを代表とするような鉄筋コンクリートを使った建築が主流です。鉄筋コンクリートを使えば、どんな画を描いてもその通りに造ることができる。素材から受ける制約がない。でも本来なら制約があるはずだね。隈研吾は「更地にデザイナーが自由に造るような建築には僕はしない！ その土地に根ざした、その建物に対する制約を見つめる。そしてその制約に負ける。もしもその制約がないような土地だったら、必死で制約を探して、その制約に負けるんだ」と、すごいことを言っています。

君たちの人生もそうです。君たちという人間を更地にして、その上に鉄筋コンクリートで自由なかたちを造りたいのかもしれないけれど、実際には制約だらけでしょう？ その制約が敵だと思っていたら、その制約とは和解できない。「なぜ私はこういう顔かたちで生まれてしまったんだろう」「なぜ私の才能はこの程度なんだろう」というように制約を敵だと思っていたら、これは脳に抑制をかけることになります。そしてその結果たまったエネルギーが社会に対するルサンチマンになるわけです。そういう人は、日本にもいっぱいいます。でもね、制約に負ける人生はすばらしい。自分がどんな姿かたちでも受け入れる。だって、それ以上のことから出発できないのだから。

僕は今大事なことを言っています。制約に負けると考えたら、人生は楽しいわけです。劣等感はOK。どんなデザイナーでもOK。どんなバカでもOK。そう考ええると嬉しくない？ ダーウィンは、ミミズだって人間だって同じ進化のなかで生まれていると言ったわけですよ。ミミズの生活を想像してみてください。土の中で動いて、土を食べて排出して生きています。へたすると、車などにひかれてペちゃんこになってしまふ。ミミズの人生にも偶有性があるでしょう？ メスとの出会いとか、モグラとの闘いとか、

いろいろとある。それが楽しいと思えますか、ということなんです。もちろん、人生の偶有性とは危険なことでもあるわけだよ。

どんな人間も偶有性において平等である

「My Life as a Dog」（一九八五年）というスウェーデンのすばらしい映画があつて、もしこの中で見えない人がいたら、ぜひ見たほうがいいと思います。とくに男の子が女の子と一緒に映画を見るなら、「My Life as a Dog」はおすすめてです。君たちのことを彼女がどう思うかはわからないけれど、映画の主人公のことは「この子、なんていい人なの、すてき」と思ってくれると思います（笑）。

主人公はすごく不幸な男の子なだけけれど、その子はいつも、たとえば運動場を歩いてやり投げにささって死んじゃった人や、エサや水も十分にならないまま、人工衛星に乗せられてしまつて、地球をぐるぐると回っていたライカ犬など、自分よりもっと不幸な人たちのことを思い浮かべて、「あの人たちに比べれば、僕はましだ」と自分を慰めている。「ライカ犬を人工衛星に乗せた人は犬がどう思うのかわかんかったのかなあ」と思うような、すごくいい子なんだ。その子は「シツカン」という犬を飼っているんだけど、シツカンが吠えようと、病気のお母さんが「うるさい！」ってヒステリーになることがあつて、そんなときにはシツカンの口をおさえて、ベッドの下で小さくなつて聞こえないふりをする。シツカンは結局お母さんのじゃまになるからといって、おじさんに殺されてしまふんだよね。それを知った主人公は、おじさんの家の庭にあるツリーハウスに立てこもつて、おじさんに向かって、シツ

カンのまねをして「ワン、ワン、ワン！」って吠える。おじさんのことは非難しない。翌朝、おじさんが悪かったって謝りにくると、その子は「ぼくはシツカンに言いたかったんだ。僕は、シツカンを保健所に連れて行くことは知らなかったんだって」って言う。すごくいい話だろう？

この映画に流れているグルーヴは、僕が今言っているようなことなんです。どんなにひどい境遇でも、どんなにダサイ人でも、そこに偶有性は平等にあるということです。偶有性はどんな人にも平等にある。で、その偶有性を通してわれわれは学ぶわけです。だから福澤先生が言った「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」というのは、偶有性は誰にでも平等にあるということなんです。わかるかなあ？ わかってほしいなあ。

所有に意味はない、変化に意味がある

僕にはまだ未解決の問題もあって、たとえば死にゆく人にとつての希望とは何だろうと考えることもあります。死にゆくということは、結局、自分がなくなってしまうことでしょう？

僕は東京藝術大学でも教えていて、美術評論もしていますが、国宝にもなっている「はやくいこう早来迎」という画を知っていますか？ 修行をしていた行者がいよいよ死にそうだというと、無限の彼方からお釈迦様が雲に乗って、光のスピードでその人を救いに来るんです。魂の救急車みたいなものです。君たちがいよいよ死にそうだというときに、お釈迦様が無限の彼方からぐおーっと駆けつける、それが「早来迎」という画です。すごいですね、日本人の宗教観って。

この「早来迎」のようなものが最期に見るビジョン、あるいは仮想というか、死にゆく人にとつての希望なのかもしれないけれど、それはわからないですよ。そういうわけなので、偶有性という通貨さえつかんでおけば楽しいはずですよ。

困ったことに、人間、才があると、自分がまだつかんでない何かに憧れてしまうのです。とくに若いときはそうですね。彼女がいない人は彼女がいる人をうらやましいと思うし、行ったこともない超高級フレンチレストランではいかにすばらしい食事が食べられるのだろうかと思ったりする。レオナルド・ダイカプリオみたいな映画俳優になったらどんなすばらしい人生が待っているのだろうか、それに比べると、僕は全然だめだと、そういうことを思ったりするでしょう？

でも、そこに行った瞬間に偶有性は消えてしまう。君たちがダイカプリオだったら、ダイカプリオであることが退屈な日常になってしまうのだから。つまり、偶有性は変化からしか起こらないわけです。所有から偶有性は生まれない。たいていの世の中の才は、先回りしてみれば、たいしたことはないということです。

僕は、いろいろなところでご飯をご馳走になることがあって、たとえば東京のすごく高い店にも行ったりします。でも、そこで食べる料理の味は、高校の頃に枝にマシユマロを付けて焼き火であぶって食べた味と変わらなくて、むしろそのマシユマロのほうがいいかった、ということもあるんです。落語にもあるけれど、昔の人は、たとえば米粒を爪楊枝の先につけて、火であぶって、醤油をつけて、それで酒を飲んだりした。それと、一人五万円のコースの高級フレンチとどちらがいいと思う？ 若いときにはいろいろとあこがれることもあると思うけれど、そういうことをよく考えてほしいと思います。

つまり、所有ということにはあまり意味がないということです。変化にだけ意味がある。だから、クリスマスにちよつと奮発してガールフレンドと一緒にフレンチに行ったとしましょう。シャンパンから始めて、チーズとデザートでしめて、そういうすてきな一夜を過ごした。そういうことを体験したこと自体には意味がある。ただ、体験したものを自分のものにしてしまつて、それを自我のよりどころのうにしてしまうと、これはダメです。百円ショップのバッグと、ルイ・ヴィトンのバッグとそんなにちがいますか？ 同じでしょう？ ルイ・ヴィトンをもてなかつた人がもてるようになるという変化には意味があるけれど、所有ということには意味がない。そしてそれに気づいている人だけが命を輝かせることができるんです。

質疑応答

Q1 学生A(理工学部四年生) 今日のお話の内容とはちよつと関係がないのですが、僕は科学哲学に興味がありまして、いわゆる心の問題、心身問題などで、この先、既存の科学方法論で哲学者などが納得できるような解答が得られると思いますか？ それとも方法論を変えないとたどりつけないと思いますか？

A 君は知っていると思うけれど、コリン・マツギンという人はコグニティブ・クロージャーというこ

とを言っていて、無理だと言っています。無理だという主張にはそれなりの納得すべき理由がある。でも、われわれの立場としては、当然、何とかして風穴を開けようとあがくしかないわけです。僕のクオリアの問題というのは、おそらく僕のライフタイムのなかでは解けない可能性が高いと思う。でも、それ以外に考えるべきおもしろい問題がないことも事実。本当のことを言うと、心身問題以外の問題は僕にとつてはどうでもいいことなんです。誰が考えても、それ以上に重要なことはないんだから。だから先ほど言ったように解答を所有することに意味があるのではなくて、あがき続けることに意味があるんだから、それでいいんじゃないですか？

君は、たとえばそういう意識関係の集まりとか参加したことはありますか？ 仲間がたくさんいる？ 日本ではどうも科学と哲学を別々に考える悪いクセがあるんだけど、欧米の人にとつてはあたりまえのことだからね。彼らはクラウン・ジュエル（あるいはホーリー・ジュエル）が何かはわかっているから。人間のインテリジェントな歴史のなかで何が最も価値のあるものなのか、彼らはよくわかっている。それはノーベル賞ではない。心身問題を解くことです。これが解けたら、それはすごい。そこを目指すべきだということは、まともなインテリにとつては明らかなことなんだよね。だから、解けなくてもいいじゃない。

Q もうひとつ質問があります。将来、大物になるために学生るときから身につけておいたほうがいいことはありますか？

A 僕は最近横方向に大物になっているからなあ（笑）。漱石の『三四郎』にいつでも「大論文を書いている」と言っている、与次郎という人物が出て来ます。三四郎が誘いに来ると、「論文を書いている

から」って言うんだけど、どうせ彼は書かないんだ。彼は三四郎に「ロマンティック・アイロニー」って言うんだけど、「ロマンティック・アイロニー」の意味を調べてみたら、ドイツロマン派の概念で「天才というのはなにもしないで、ぶらぶらしてはいけない」ということらしいんだ。つまり、何が言いたいかというと、僕は、学生時代はこの「ロマンティック・アイロニー」の時間帯が一番大事だと思います。昔は、学業をまじめにやる学生にはろくな学生はいないと言われたんだよ。「ロマンティック・アイロニー」こそが大事なんです。僕にとって最もロマンティック・アイロニーな夜というのは、塩谷賢（哲学者・時間論・美学）とふたり、隅田川のほとりで、缶ビールを飲みながらくだをまいていたときかなあ。俺たちのまわり半径十メートルぐらいをカップルたちがよけていくんだ。その夜が最もロマンティック・アイロニーだった（笑）。そういう時間をいかに持っているかで、大人になって忙しく働くときの貯金ができるような気がします。

Q2 学生B（商学部二年） 私は商学部に所属しているのですが、環境や建築にも興味がありまして、先生がおっしゃられていた文系と理系のボーダーがあまりない大学になったらいいなと思っています。先生が描く今後の大学像がありましたら、お聞かせください。

A おっしゃるとおり、環境・生命・認知はすべてシステムのアプローチをとらないと解けない課題ですね。要素技術だけがあっても解けない時代で、それが二十一世紀の緊急課題で、僕がいるソニー・コンピュータサイエンス研究所でもエコロジイ関係の研究をこれからやっというかと思っていますし、だいたい偶有性自体が環境問題や進化論と関係を持っています。大学が組織としてどうしたらいいかと

いうことは、これはなかなか難しい問題です。どんなに組織を作ってもだめで、やっぱりいい人を集めるしかないと思います。「人」は本当に大事です。僕は何人かのかけがえのない友人を持っていますが、彼ら一人が失われるということはひとつの世界が失われるのと同じくらい大きなことなんです。そういういい人、あなたが興味を持っている環境に同じように興味を持っていてる同志を早く見つけることです。だいたい君たちぐらいの年だと、ほとんどの人が無名で、ロマンティック・アイロニー状態だと思うけれど、そのなかでもすごい人、将来友だちになれる人を見つけることは大事ですよ。そういう人は絶対に裏切らないから。そこから考えたらどうでしょう？ まず自分のまわりのネットワークを作ったらいという事です。

Q3 学生C（法学部一年生） 知識や経験の中から自分の生きる指針を見つけたと思った時点で硬直してしまっているとおっしゃっていましたが、人生の生きる指針はどういうふうに生まれるとお考えですか？

A 正確に言うともちろん知識や経験に基づくものですが、そこからダイレクトに演繹しようとする態度はたいてい失敗します。なんというか……、生き生きとした様子、音楽の記号で言うところ「リバージュ」のようなものが失われるとダメなんです。難しいですね、その質問に答えるのは。子どものときは日が暮れるまで夢中になって遊んでいただろう？ 僕が最近思っているのは、子どものころのようなああいう感じで生きていけば大丈夫なんじゃないか、ということなんです。うまく言えないんだけどね。何歳になってもそういう感じでいられればいいと思っています。

それと、自分が生きる指針を見つげるためには、やっぱりいろいろな知識をもったほうがいい。それが君の生きる指針になると思う。また、君自身が持つていなくても、いろいろな分野の友だちがいるとすごくいい。そういう意味でもネットワークを作ることとはすごく大事です。慶應のような総合大学の強みはそこです。いろいろな友だちがいる。これは本当にすばらしいことで、できるだけ違う人と会って話すべきです。

Q4 学生D (商学部一年生) 今の世の中、劣等感があって、ものごとを決めつけがちな人や、中学・高校の頃に引きこもりがちになってしまっている人がたくさんいると思いますが、そういう人に「こういう偶有性もあるんだよ」とわかりやすく伝えるためには、どう伝えたらいいでしょうか。

A 僕は今、一緒に遊ぶのがいいんじゃないかなと思っています。簡単そうに聞こえるけれど、一緒に遊ぶことって難しいんですよ。ひとつの遊びが発見されるということは、人類にとつては偉大なる福音であって、今日も早稲田と慶應は神宮球場で一緒に遊んだわけでしょう(笑)。これがいかにすごいことか。学問もそうなんですよ、遊びなんです。一緒に遊べるルールがあるんです。だからそういう苦しい人がいたら、一緒に遊べる遊びを見つげる。その遊びを君が発見できたら、人類にとつてはたいへんな blessing (福音) になると思います。遊びを発明するのは大事。E.I. は一千億円でしょう? M.I. も遊びなんです。ああいう遊びを発見して、一千億になったわけだから。そういう視点は大事だと思いますよ。遊びを発明してみてください。儲かります(笑)。

Q5 学生E (理工学部二年生) 私は文学がすごく好きで、頭でっかちで、物理を勉強しないで文学ばかりやっているんですが、茂木さんの文学的な素養の探求遍歴をお聞かせください。

A そうか、君はなかなか難しい人生になつてきているんだね(笑)。どうするの、将来作家になるの？

Q いや、わからないですが、ものを書くようなジャーナリズムの方向に進もうかなとは思っているんですが……。

A 僕は君よりも少し人生の先輩で、物理学で博士号をとっています。でも、それがスクエアなことには思えたことも一時ありました。『文学界』で連載をしていて、島田雅彦らと友だちにもなったりもしました。その後、芸大で授業をやるようになって、アーティストの人たちともずいぶん知り合ったりもしています。それで、君の一番の問題点は、君が今物理をやっているということが、案外、後々で大事になるということなんだ。想像してみてもほしいけれど。文学や芸術をやっている人って何か贈り物を持っているわけでしょう？ で、そこで、君の物理的なものを否定したり、隠したりして、相手の仲間だと思わせても、それには意味がないし、相手にも喜んでもらえない。むしろ、文学論を語り合った後で、ちょっと憂鬱な顔をしてファインマンダイアグラムなんか書いたらさ、みんなに「おおっ！」って言われるかもしれない。その計算が間違つていても別にいいんだけれど、みんな喜んでくれるわけですよ(笑)。だから、自分の根っこは絶対に持つていたほうがいい。異質なものとのお出合いが人生を活性化するための、ぜひ物理をまじめにやってほしいと思いますね。そして文学もやってほしい。確かに、自分の立ち位置をどうするかっていうのは難しいと思う。でも、もしも本気で文学をやりたいのなら、夢を見ているだけでなく、なるべく早くに現場に入つていったほうがいいと思うよ。でも文章って人だからね。た

たとえば開高健の文章はすごいよ。彼の最後の作品『珠玉』は「女」だったんだから。表現は行動の果実だから。君がどういう人生を生きるかで、憑依するものは変わってくるから、そこはよく考えたほうがいいと思う。おもしろく生きないと、表現もおもしろくなくなる。わかる？ その感じ。

表現者として大成している人はみんな、生き方において、派手なことをやるわけではないけれど、偶有性においてあがいて苦しんで欲びを見つけてということをやっている。作家など実物を見ればいいと思うよ。みんな、胸の中に魔物を飼っているよ。魔物を飼う勇気がなかったら、表現者はめげせない。魔物は飼っていますか？

Q わかりません。

A 誰か彼が魔物を飼うのを助けてあげてください(笑)。ちなみに僕の文学遍歴だけど、小学校五年のときに読んで影響を受けたのがソルジェーニツインの短編『イワン・デニーソヴィチの一日』です。

Q6 聴講者A(卒業生) お話の中で偶有性を持つものは輝いているとおっしゃっていましたが、先生の考える音楽についておうかがいしたいと思います。偶有性の多いものが素晴らしいとするならば、どのような音楽が理想的であるか、先生の好みにおいてお教えください。

A 僕は高校・大学のときにはワグナーのオペラがとても好きでした。バッハも好きだし、最近ではモーツアルトも好きです。でもポップスも好きだし、カラオケでのレパートリーは尾崎です。ニーチェの『悲劇の誕生』などを読むと、古代ギリシャの美学において音楽がどれだけの重要だったかということと言っているように、音楽と生命哲学とは関わりが深いんです。だって、リズムがあるでしょう？

メロディやハーモニーがあるでしょう？ いい音楽というのは基本的に生命のリズムに近いものだと思うし、いわゆる音楽と言われるものだけが音楽ではなくて、われわれのしゃべり方や生き方も全部音楽だと思えます。しゃべるのを聞いていてつらくなる人というのは、音楽としてだめなんです。実は君たち自身が演奏しているんですよ。逆に君たちが楽器なのであって、たとえば絵を見ると、君たちの脳の中に何がわき起こるか、君たちのからだに何が生まれるかということは、君たちが楽器としてどれだけよく鳴るかということなんです。だから、君たちは、人の話を聞いているときに自分が楽器としてどのくらい鳴るかということに気を気にしなくてはいけません。それが大事。その修行を僕はいつもNHKの番組収録のときにやっています。十五分に編集されていますが、実は四時間ずっと話を聞いています。話を聞きながら、どうやって自分の楽器を鳴らそうかと考えているんです。

それ以上に音楽はどこにでもある。そういう眼で見たとときに、どのジャンルの音楽でもよくて、自分の生きる音楽にあった音楽が見つかると思います。

Q7 学生F (法学部二年生) 先生が人間を科学していくうえで、の夢は何でしょう？

A それはクオリアという問題を解くことですが、それは何かというと、意識の中での感覚、たとえば「バラが赤い」「水は冷たい」ということが脳のどういう物質から出来ているのかということを解き明かすのが僕のテーマです。三十二歳のときに出会ってから、ずっと考えていて、生きているあいだに解決に少しでも近づけばいいなと思っています。でもそれは「百ノーベル」だから。ちなみにノーベル賞をひとつももらえない難しさが「一ノーベル」です(笑)。

もう少し小さな夢は、日々新しい気づきや発見があるということだな。それは何ものにもかえられない。たとえば昨日芸大の授業が終わって、上野公園で飲み会をしながら気づいたことは、自分はずっと小乗仏教をやっていたんだということ。僕は、講演会のとくに自分の中にすでにあるもの、叡知のようなものをみなさんに向かって啓蒙している、広めているというつもりはまったくありません。僕はまだそれほど大した人間じゃあないから。実はここで自分で発見しながらしゃべっているんです。講演はいわば僕の「公開修行」のようなもの。僕自身が模索していて、しゃべっていることは自分自身が最近発見したことなんです。そういう小さな気づきがたくさんあって、それらが脳科学をやっていることとうまく結びついて、おもしろいことができれば、クオリアの問題が解けなくても、とりあえず嬉しいかなという感じですよ。

Q8 学生G (文学部四年生) 私はふだんフランスの現代思想とアートの関係を勉強しているので、最近理系の知識の必要性をどんどん感じていきます。たとえば、先ほどお話しにもでてきたE.H.の仕組みなどがわかっていたら、文系のほうからもアプローチできますし、ありふれた日常の背後にすごいことがあるということについても、理系と文系の両方から言えると思っています。理系と文系とがコラボレーションをするときにはどういう点が大切でしょうか？

A うまく言えないんですが、男と女ってちがうから、生命のコラボレーションが楽しいんだよね。君も自分のやっているフランス現代思想とアートという専門について、まずは徹底的に強度を持ってつきつめないといけないと思います。強度ってすごく大事で、コラボレーションをするときには、それを贈

り物として、いろいろなところに行くことかなあ。薄まったらいけないんです。何でも屋になったらいけないですよ。やっぱり強度を持って、強く何かを持たなくてはいけないんです。それは何でもいい。小さなものでもいい。彫刻家の内藤礼さんを知っていますか？ 彼女はすごく小さなものを創るんだけど、それが彼女の世の中に対する贈り物で、四百字の原稿を書くのには一週間もかかるという人なんです。だから、君が持つべき贈り物って何かを考えたらいんだと思います。理系の知識などを持つことはいいことだけれど、君が強度のある贈り物を持っていたら、理系の知識や贈り物を持つている人とコラボレーションすればいいですよ。

Q9 学生H（理工学部一年生） 先生のお話を聞いていて思ったのですが、人生の選択とは要するに可能性を排除することではないですか。そういう意味では、偶有性とは、可能性を排除していく中で、ひとつの選択の条件として、より可能性が広がる選択を優先するとよいのでしょうか？

A センスのいい質問ですね。まさに選択とは、他の可能性を殺すわけですね。前述した塩谷賢は「人生とは日々、瞬間瞬間死んでいく膨大な可能性のことである」と言っています。まさしくそうなんです。僕は今日ここに来て講演をしている。だから他の可能性は死んでいるわけだ。そのときにどういう選択をすればいいかということですが、今君は「可能性が広がる選択」といったけれど、単純な、ひとつの原理では決められないと思います。なぜかと言うと、モノカルチャー、ひとつのイデオロギーでは人生は語れないから。ときには選択の幅を広げるような選択をしたほうがいいかもしれないし、ときには反対に狭めるような選択をしたほうがいいかもしれない。それは一概には言えません。まさ

にそこをAI (Artificial Intelligence) の研究者の人たちは苦勞しているわけで、さらに僕が「偶有性」という言葉に込めた、言いたいことなんです。だからそう簡単なことではないんです。

Q10 学生I (理工学部一年生) 僕は生まれてこのかた、彼女ができたことがないんです。どうしたらいいでしょうか (笑)。

A 君、ルックスもそう悪くないじゃない。自分ではどう分析しているの？ ぱっと見ただけじゃあわからないなあ。君と一時間ぐらい話せばわかると思うけれど (笑)。自分で何か気づいていることはないですか？

Q 僕は男子校出身なので、女の子と話す機会がなかったんです。

A そうか。でも大丈夫、君はもう一歩前に進んでいるよ。だって今、この場でたくさんの人を前にして「彼女ができない」ってことを告白しているわけだから。僕の判断では、君は明日にでももう彼女ができる！ そういうやつは大丈夫！ 自分の欠点を人前で客観視して言えるようになったら、これらもう大丈夫です。そういう男を女の子は受け入れるから。一番だめなのは、本当は自分もずっと彼女ができないにも関わらず、たとえばむつりとか、まじめぶっている人は危機的な状況かもしれない。君は大丈夫だよ。会場にいる女子はみんなそう思ったと思うよ。

あともう一点はプラクティカルに考える必要があつて、女の子との出会いの場はありますか？

『Science』というアメリカの科学雑誌に、ネットワークのインタラクチュアルに関するおもしろい研究があつて、電子メールのヘッダーだけを見て、誰が誰に送っているのか、何モード離れて、新しく

メールを交換し始めるかという解析をしている研究なんです。君に理想の女の子がいるとして、君と何かシエアでできるものを持つているとする。でも誰かと誰かがシエアでできるものを持つているだけでは、人は出会わないんだ。同じものを志向しているという理由では絶対に人と人は出会わなくて、同じクラスにいたとか、同じ授業をとっていたとか、友だちの友だちだったとか、非常に即物的な、物理的な理由で会うんです。だから、君が出会いを求めているのなら、そういうプラクティカルなアプローチを取るべきなんだ。君の人生を振り返って、一カ月に何人の女性と話す機会があつたか。出会っているのはそういうもんだから。大丈夫だから、がんばってね。

Q 11 聴講者B (慶應義塾高校三年生) 「プロフェッショナル」を毎週見ていて思うのですが、「プロフェッショナル」の考え方は学術的なものが多いと思います。一方、テレビ朝日で放映している「オーラの泉」で中心となっているのは前世などスピリチュアルな考え方ですが、茂木先生はそういうものに関してどう思われますか？

A まず「プロフェッショナル」を見てくれてありがとうございます。僕は、江原さんと対談したことがあるんです。今度、新潟でも江原さんと二時間ぐらい対談する予定です。彼自身は偶有性の中で生きてきた人なんです。小さいときに父親を亡くして、とても苦労している。科学的に言うと、背後霊や前世などそういうことについては答えは出ていて、それはすべて脳内現象なんです。その人がそう思っているだけなんです。何を言ってもかまわないですよ。たとえば「この教室にはさつきからUFOが飛び回っている」と言う人がいても、それはその人にとって真実かもしれないじゃないですか。ただ科学者は、脳内

現象が見えているというだけでは、それを真実とは認めないからね。そして、スピリチュアルをやっている人たちはそれを検証しようとは思わないでしょう？ それは勝手にやればいいと思います。江原さんについても、自分の生き方であなつたわけだし、それについて何も言うつもりはありませんが、問題はそれを鵜呑みにする人たちで、そういう人たちは偶有性をものすごく消してしまっていると思います。それはもつたいたい。スピリチュアル・ファンというのはいわゆる「ラクをしたい人たち」だからね。

これは大事なことだから言っておきたいんだけど、仏陀という人は「無記」を貫いたんだから。僕はその生き方に非常に共感します。「無記」という言葉を覚えておくといいですよ。一番大事なことは言わなくていいということ。これは、仏陀が「死後の世界はあるのか」「霊はあるのか」などと聞かれたときに、「私はそういうことには一切答えない。たとえば目の前に毒矢に当たって苦しんでいる男がいるときに、あなたは毒矢がどこから飛んできたのかとか、その毒は何なのかとか、そういうことを聞くだらうか。そんなことよりも苦しんでいる男の苦しみを除くほうが先だろう」と答えたところから来ています。そもそも仏教というのは、本当は極楽浄土などとは言わないんだよ。釈迦は極楽浄土や地獄があるなんてことは一切言っていない。一切そういうことには答えない。僕は、スピリチュアルのように決めつけてしまうよりも、そちらのほうに共感できるんです。そして、そのほうが偶有性をいかすことにつながると思う。スピリチュアル・ファンは、要するに、決めつけてもらいたくない、ラクしたいということなんです。それは釈迦の「無記」という強度には勝てないと思います。無記を貫くという人生は美しいですよ。

Q 12 学生J (理工学部一年生) 偶有性というお話を初めて聞いて、どのぐらい理解できたかは別として、変化を楽しむということでも共感しました。僕自身もこれからインターンに行ったり、海外でボランティアに行ったりといろいろなことをしていきたいと思います。ただそうしたことを大学時代にやるのは簡単ですが、卒業してから、三〇歳、四〇歳のおじさんになってからも、同じ情熱を持って生きていけるかどうかについてはとても不安です。茂木先生は今もとても生き生きしていらっしやるので、それを維持する秘訣があったら教えてほしいと思います。

A ありがとうございます。それは仲間を作ることです。僕には本当にすばらしい仲間がいるんです。たとえば池上高志や塩谷賢、郡司ペギオ幸夫。郡司ペギオ幸夫って名前はどこからついたか知っている？ 自分の子どもが生まれたときに、奥さんに「あなたは何もしないんだから子ども名前ぐらい考えてよ」と言われて、「じゃあ、ペンギン。男の子だからペギオにする」って言ったんだけど、「それだけはやめてくれ」と却下されて、自分のミドルネームにしたんだよ(笑)。それで論文を書いているんだから。「現代思想」の編集者が、最初に「郡司ペギオ幸夫」と書かれた論文を手にしたときには絶句したらくて、「これでは困る」と言ったらしいけれど、「この名前でなければ載せない」と言い張ったらしいです。僕にはかけがえない友人がいて、そいつらの共通点はいつまでたってもパッションがあるということです。そして、パッションがあるということは生きるうえで一番大事なことだと、僕は思っています。こういう講演って、どこかでバカにしている風潮があるでしょう？ 僕はまじめにやっていますよ。それは文藝評論家・小林秀雄の講演CD(新潮社)を聴いて、講演に対する考え方を改めたんです。彼の講演を聴いたら人生が変わります。小林秀雄の熱のある感じというのは、江戸時代の国学の大家・

本居宣長の文章にもあるんです。熱さの系譜っていうのがあるんですね。その系譜に連なるためには、熱い友だちと一緒にいることです。まわりが熱くないと、だんだん感染していってしまう。熱くない組織に入ってまわりに合わせたら、熱くなくなってしまうんです。でもまわりに熱い友だちがいたら、熱いままでいられると思います。今、まわりに熱い友だちがいるなら、そういう人たちを大切にしましょう。